
PERSONA4 After ~ **過ぎし刻の足跡** ~

葵鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PERSONA 4 After ～過ぎし刻の足跡～

【Nコード】

N5867M

【作者名】

葵鏡

【あらすじ】

アメノサギリを倒し、事件を解決した彼らのその後の物語。それぞれが辿った軌跡の記録。

このシリーズは基本、1話完結の短編集となっております。

花村陽介 『あの高い青空を見上げて』

相棒が稲羽を去って、俺達は3年に進級した。

クマのヤツは相変わらずあつちの世界に一人で居るのが寂しいと、家に半ば居候の状態を続けている。

まあ、親父もお袋もクマのヤツを気に入っているようなのでその辺りは問題はないのだが、アイツの生活費を俺が捻出している現状を、そろそろどうにかしたいところだ。

これじゃ、いつまで経ってもバイクの免許が取れやしねえ。

3年に進級してクラス替えはあったのだが、運が良いのか悪いのか、天城や里中とは今年も同じクラスだ。

里中のヤツは「またアンタと同じクラスなのか……」などと失礼なことを宣ってくれたが、里中なりの親愛の証みたいなモノだと解っているので、その辺りは適当に受け流してみた。

まあ、今年の担任がまた柏木なのは正直勘弁してもらいたかったけどな。

今年は卒業後の進路とか色々と面倒な事が多い年になりそうだが、今のところはこれといって進路に希望があるわけではなく、ゆっくり考えていけば良いかと思っていた。

ほかの連中の事を知るまでは……

3年に進級して早々、里中の奴が熱心に勉強へと取り組み始めた。天変地異の前触れか？ とからかってみたが、里中の奴は真面目な顔をして「刑事になる為に、今更遅いかも知れないけれど勉強出来ないとね」と答えられた。

そつえば相棒と一緒に去年、カツアゲグループと一悶着あったとか言ってたっけ。

それだけが原因じゃないとは思うが、里中なりに思うところがあって刑事を目指すようになったんだな。

天城のヤツも、実家の女将修行に本腰を入れるような事を言ってたっけ。

確かインテリアコーディネイトの資格を取るとか言ってたような気がする。

俺だけが進路の展望が定まってる事じゃない事に焦りを感じた。

クマのヤツは元々こっちの世界の住人じゃないが、今ではジユネスに無くてはならない存在になっているし、完二のヤツも月に1回、特技の裁縫を生かした編みぐるみの教室を開いているそうだ。

りせも今年から芸能界復帰の為の下準備を着実に進めている。

直斗は直斗で元から探偵として活動していたのだから、今更進路をって考えたりする訳はないか。

俺自身に何が出来て何がやりたいんだろう。

自分自身のことなのに、何一つ解っていない事が情けなく思えた。

3

休日。特に用事がないときは菜々子ちゃんと一緒に遊ぶことが多いのだが、ここ最近では里中が頻繁に菜々子ちゃんの相手をしている。何でも、現役の刑事である堂島さんから話を聞いているらしい。

堂島さんも最初の頃は戸惑っていたようだが、菜々子ちゃんの面倒を見てもらっている事もあってか話す機会も増え、今では刑事としての心構えなどのアドバイスをしているらしい。

それだけ里中も本気なんだろうけど……

里中、頼むから菜々子ちゃんに物騒な技を教えないでくれ。

今教えてるそれ、シャドウを吹き飛ばすときに使ってる蹴り技だろっ？

ああ…… 菜々子ちゃんがもの凄く楽しそうな笑顔で練習に励んでいる。

相棒、スマン。俺には止める事はできそうにないわ……

ゴールデンウィークに入って、相棒が稲羽に帰ってきた。

相棒から向こうの様子を聞いてみたが、去年の稲羽での出来事と比べると、至って平和な日々を過ごしているとの返答だった。

ここ最近の俺達の近況や、菜々子ちゃんが里中に型を教えてもらっている事などを話したが、里中から型を教えてもらっていることは、菜々子ちゃんからのメールで知っていたらしい。

何とも微妙な苦笑いを浮かべて話していた相棒の、珍しい表情が見られたのが印象的だったな。

まあ、そんなこともあったが、良い機会かと思ひ相棒に進路のことを相談してみた。

相棒も今のところは進路を決めていないと言っていたが、俺とは逆でやりたいことが絞り込めなくて「いつそのこと出来ることを全部やってみようか？」などと冗談めかして話してくれた。

まあ、相棒の恐ろしいところは、それが冗談ですまない所なんだよなあ……

多芸すぎるにも限度があると俺は思うぞ？

俺の相談の方だが、相棒から「ジュネスの仕事で、稲羽に貢献できることがあるんじゃないのか？」とアドバイスを貰った。

そういえば、今年に入ってからジュネスなどの大型チェーン店が進出したことよって地域商店街の過疎化が進み、人通りが少なくなった商店街などで犯罪が横行する事が増えたとかニュースで言っていたな。

去年、相棒とカツアゲグループとの間で揉め事があったらしいが、それに関係したことなんだよな。

それから色々とその辺りのことを調べたみたが、結構あちこちで似たような状況になっているらしい。

進出してきた大型チェーン店が、業績悪化で撤退した煽りを喰らってトドメを刺した事例とか、正直笑えない問題だと思った。

今のところジュネスではそういった不安要素は無いと思うが、稲羽中央通り商店街は深刻な状況じゃないのかと思う。

そういえば尚紀から聞いた話にも、日本酒から作った化粧水の売り上げが中々伸びないというのがあったな。

その辺りに、何かしらのヒントが隠れているかもしれないな。

夏になり、リセが本格的に芸能界活動を再開した。

流石に1年のブランクは厳しそうだったが、頑張っているようだ。直斗のやつも、ここの所は探偵業で学校を時々休学している。

天城はめでたくインテリアコーディネーターの資格を取ることが出来た。

完二も編みぐるみ教室が好評で、最近ではまわり近所との交流も良い方向に変わってきているらしい。

里中はこの間の中間試験でこれまで頑張った成果を出して上位にランクインしていた。

クマのヤツはフードコート焼き場を任されるようになって、給料が上がったことを喜んでいた。

そんな中、俺だけが未だに自分の先行きが見えていなかったんだ……

秋になり、未だに見いだせなかった俺に答えを示してくれたのは菜々子ちゃんだった。

それはある日の休日、偶々その日はジュネスでなくて丸久豆腐店に豆腐の買い出しに皆で付き合っていたことだ。

菜々子ちゃんの「ジュネスでもここのお豆腐が買えたら良いのね」という一言が全ての答えだった。

ジュネスへの稲羽中央通り商店街の店舗出店。

確かにジュネスでは専門店も取り扱ってはいるが、地元商店街の店舗を出してはいなかった。

その辺りの詳しい事は今の俺には解らないが、色々難しい問題

があるのだろう。

取り敢えず、この案を軸にどうすれば上手く行くかを煮詰めた方が良さそうだ。

冬になり、それぞれが目指す進路への最終調整が進む中、息抜きに皆でクリスマスパーティーをする事になった。

相棒もその日は稲羽に戻ってくるそうだ。

仕事が忙しいはずのりせも、その日のオフをもぎ取ったらしく参加すること。

というか、りせは本当に凄と思う。

復帰早々は色々と苦労していたようだが、今ではトップアイドルまで手が届く距離まで巻き返してきたのだから。

クリスマスパーティーは去年と同じく堂島さん宅で行われた。

去年と違い今年のケーキは既製品だったが、前もって予約を入れて注文しておいた物だからそれなりに凝った作りをしている。

味の方も、甘過ぎない味付けが俺達男性陣にも食べやすく好評だった。

今年の菜々子ちゃんへのプレゼントは、卒業を控えている俺と里中と天城の3人でパステル調のマフラーと手袋を、クマと完二は共同で制作した手製の編みぐるみのセット。

りせからは可愛い細工の施されたブローチで、直斗は手製の多機能ペン。

そして相棒からは、菜々子ちゃんが欲しがっていた最近話題になっている絵本だった。

菜々子ちゃんの喜ぶ顔を見て、妹が居たらこんな感じなのかなと思っただ。

年が明けて各々の進路も確定し、卒業式まで残すところあと僅かとなった俺達。

里中は警察官への採用が無事決定し、春から警察学校での研修へ

の準備に余念がない。

天城は高校卒業後、実家での女将修行を本格的に始めるらしい。そして俺はジュネスにクマ共々採用が決定した。

ジュネスに正式採用となった俺とクマだが、実際やっていることは今までと大きく変わらない。

まあ、給料の面でもともな額が支給されることになったのが、一番大きな変更点だろう。

高校在学中、建前上は他のバイト連中と同額って言ってたけど、実際はそれよりも少なかったからな。

とはいえ、働いている時間が時間だっただけに他のバイト連中よりは貰っていたのだが、その事を全く見ずに文句を言ってくれるヤツも居たな。

主に何かと仕事をさぼりたがる先輩二名。

流石にその件で所構わず文句を言われたら他のバイト連中にも悪影響が出るので、俺の給与明細を見せてどれだけの時間を働いていたかを理解させた。

俺の時給が4000円って知った時のあの二人の表情は見物だったな。

それ以降あの先輩達からの文句を聞いてない所か、少しだけ勤務態度が良くなったのには驚いた。

入社半年ほどして、高校在学中に考えてた案を親父に相談してみた。

その結果、親父からこの件に関しては俺に一任するという事が付いた。

ここ最近になって、ジュネスなどの大型チェーン店舗による近隣

商店街への弊害が改めて取り上げられるようになり、ジュネス全体としても近隣地域に配慮した企業展開が求められるようになっていくとかで、親父も対応に苦慮しているようだ。

それもあって、親父も俺の案に乗り気のようだ。

これが上手く行けば確かに、問題は解消されると思う。

そう樂觀していた俺は、最初の段階でこの問題が根深いことを思い知らされた。

尚紀に協力を頼み、尚紀の親父さんにコニシ酒店の出店依頼を申し込んだのだが、こちらの話を聞いて貰うどころか、カツとなった小西氏に酒瓶を投げつけられる始末だった。

幸い大した怪我をする事はなかったが、尚紀にこうなったら暫くの間はまともに話を聞いてもらえないから、様子を見て改めて話をしたいと言われた。

流石にそう言われるとこちらとしては引き下がるしかないのですが、後日改めてと言う事でその日はコニシ酒店を後にした。

改めて出店依頼を申し込むまでの間、商店街の他の店舗にも協力依頼の申し込みをしに行くことにした。

老舗染物店『巽屋』店主である完二のお袋さんは、俺の話を聞いて快く依頼を受けてくれた。

丸久豆腐店の店主でりせのおばあちゃんも快く依頼を受けてくれたのだが、りせの居ない今は多くの豆腐を作ることが出来ないのが出来ないので、常時出店は無理とのこと。

この話を聞いて、常時ジュネスに出店して貰うのとは別に、期間限定でPR的な要素を持たせた出店も悪くはないなと思った。

その条件も加えて他の店へも出店依頼を試みたところ『だいだら』と『四六商店』以外は期間限定での出店ならという条件で依頼を受けて貰える見通しが立った。

まあ、 дайだら と四六商店は扱っている商品の性質上、ジュネ

又出店は厳しいという事なのだろう。

小西氏の説得は困難を極めていた。

ジュネスに対する反感もそうなのだが、亡くなった小西先輩の事も関係していたのかも知れない。

流石に2回目からは酒瓶を投げつけられる事はなかったが、話がこじれて持ち越しになるのが何度か続く事となった。

これまでの話の内容をまとめると、小西氏としてはジュネスで自分達商店街側の店舗を出店させる事に対するジュネスのメリットが見えない事。

ジュネスに出店する事による商店街側のメリットが俺の言うように本当にあるのか、また出店する際に掛かる費用が結果として足を引く張らないのか？

主立った問題はこれくらいか。

商店街側の出店については、新たな客層の獲得になればと云う思惑もあるが、それよりも商店街が活性化する事によって稲羽が賑わうようになればという思いのほうが強い。

商店街側のメリットは、確かにやってみなければ解らないという側面があるがその辺は宣伝の仕方でもうにか出来ると考えている。

出店費用については正直な所、規定額を払って貰うのではなくて当日売り上げの1割とかを考えている。

ジュネスに商品を常時置くなら、一割引いた価格で全部買い取りでも良い。

結局の所、商店街のPRになる事の方が一番の目的なのだから、先行投資と考えれば問題はないだろう。

後考えられるのは、俺のような若造が出店依頼の担当者ってのが一番の不安要素なのかも知れないな。

他の所で依頼を受けて貰えた理由だって、俺の功績というよりは完二やりせという身内からの後押しがあつての事だし、四目内書店や愛家、惣菜大学は相棒が常連客だった事で俺のことをついでに覚

えてくれていた事が理由だ。

ここに来て、相棒の顔の広さに改めて驚かされる。

何度目かになる小西氏との交渉。

「ワシも頑固な方だが、アンタも相当に頑固だな」

小西氏は、今までに見せたことのない苦笑いを浮かべて俺に話しかけてきた。

「どんな状況でも諦めない親友がいますからね、そう簡単に諦める真似は出来ないですよ」

そう、昔の俺だったらすでに諦めていただろう。

だけど、そんな俺を相棒が変えてくれたんだ。そんな相棒に報いる為にも簡単に諦める訳にはいかないし、この企画は絶対に成功させなければならぬ。

「なるほどな。ワシも一度、その親友とやらに会ってみたくなくなったよ」

今までの態度からすると、随分と柔らかくなった小西氏に俺は面食らう。

そんな俺の表情から察したのか、小西氏は苦笑いを浮かべた。

「最初はジュネスへの反感もそうだが、交渉に来たのがアンタみたいな若造だったからな。本気でワシら商店街の店舗出店を考えているのか判断が付かなかったんだよ」

小西氏の言葉に「ああ、やっぱりそうか」といった思いが過ぎる。

「だが、尚紀に言われたんだよ。『親父に酒瓶をぶつけられたにもかかわらず、花村さんが何度も足を運んでくれたのが本気である何よりの証拠だろう』ってな」

小西氏はそう話すと、何ともバツの悪そうな表情で言葉を続ける。

「息子に言われるまで気付かなかったのが恥ずかしいよ。確かにいい加減な気持ちで来ていたのなら、酒瓶をぶつけられた最初の段階で諦めている筈だったよな」

そう言って小西氏は俺に頭を下げる。

「今更だが、本当に済まなかった。頭に血が昇ったとはいえ、自分の子と同じ年頃の相手に対して取る行動じゃなかったな」

「ちよっ、頭を上げてくださいよ。大した怪我もしなかったですし、小西さんからすれば疑っても仕方がないんですから」

俺は頭を下げた小西氏に慌てて言葉を掛ける。

その後、俺達はこれまでの事についてはお互いに水に流すという事で合意して、これからの事について話し合う事にした。

「……と、いう方向で行こうと思っておりますので小西さんの危惧については、これで解消できると思っております」

俺は考えていた小西氏の問題点に対する対処法についての説明を行った。

「それだと、そちらの方のメリットが殆ど無いと思うのだが、本気

なのかい？」

「ええ、本気です。これが上手く行けばその後の流れ次第で元は取れますし、商店街側も活性化すれば結果として稲羽全体として活気づくと考えています」

「ワシらと違ってアンタは都会から来た人間だ。なのに何故そこまでやろうとするんだい？」

俺の説明を聞いた小西氏が心底不思議そうに俺に尋ねてくる。

「正直に言うと、こっちに来た当初は何もない所だなんて思ってたんですよ。でも、色々な事があって……仲間達と共に過ごしたここが、今では大好きなんですよ」

俺の言葉に小西氏が「そうか」と小さく頷く。

「花村君と聞いたか。つかぬ事を聞くが、早紀……娘のジュネスでの様子はどうだったかね？」

小西氏の突然の質問に、俺の思考が一瞬止まる。

俺がこの町に来て初めて優しくしてくれたのが小西先輩だった。

本心では俺のことを嫌っていたのかも知れないけど、それでも俺にとっては良き先輩だった。

あの人のジュネスでの働きぶりを思い出す。

適当に見えて、その実すごく真面目だった事。

口は悪かったが優しくかった事。

「一見適当に見えて、その実すごく真面目な人でした。商品の並べ方とか、どうすれば客の目に付き購入してもらえるか、どういった

商品が売れるのかとか、いつも真剣に考えていましたね」

当時のことを思い出して話す俺の目の前で、小西氏は両手で顔を覆う。

「そうか、早紀は店のことを本当に考えていたんだな。それなのに、ワシは……ワシは……」

小西氏はそう呟くと嗚咽を漏らす。

「娘の言葉をろくに聞かず、世間体ばかり気にして……ワシは、父親失格だ」

「小西さん……」

マヨナカテレビで小西氏と小西先輩のやり取りを聞いたときは憤りを覚えたが、こうして目の前で嗚咽を漏らす小西氏の姿を見ると、小西氏も相当辛かったんじゃないのかと思えた。

仲違いして、和解する前に死別して……俺なんかと違って、どれだけ悔やみきれない日々を過ごしたんだろう。

「小西さん。俺、思うんです」

だから俺は、小西氏に伝えようと思ったんだ。

「小西先輩は居なくなっちゃったけれど、俺達が小西先輩のことを忘れずに、彼女が誇れるように生きていけばきっと、天国で笑っていてくれるんじゃないかって」

俺の言葉に小西氏は顔を覆っていた手を離す。

「だからって訳じゃないですが、お願いします。俺に力を貸してください」

そう言っただけ俺は小西氏に頭を下げる。

「頭を上げてくれないか、花村君」

頭を下げる俺の肩に手を置き、小西氏が話しかけてくる。

「君の想いは解った。ワシで良ければ、君に協力させてくれ」

小西氏の言葉に俺は反射的に顔を上げる。

顔を上げた俺の視線の先には、先ほどまでとは別人なような小西氏の姿があった。

「ありがとうございます。こちらこそ、よろしくお願いいたします」

こうして俺は小西氏の協力を得て、ようやく商店街店舗のジュネス出店のスタートラインに立てたのだった。

数日後。

ジュネスの会議室に、出店に協力してくれる商店街の人達が集まっていた。

「本日はお忙しいところ、朝早くからお集まりいただきありがとうございます」

「ございます」

俺の言葉に集まってくれた人達の視線が集まる。

その視線を前に俺は今回の企画についての概要と目的、出店する期間や順番等の説明をおこなう。

時間が掛かると思われた打ち合わせだが、小西氏や完二のお袋さん、りせのおばあちゃん達の取り成しもあって問題なく打ち合わせは進んだ。

「最後になりますが、今回の企画について一つ留めておいて欲しいことがあります」

打ち合わせも無事に終了したところで、俺は集まってくれた商店街の人達にそう前置きして一番大事なことを伝える。

「今回の企画は一度や二度で効果が出ないと思います。ですが、最初の一步を踏み出し継続することによって、必ず効果が出てくると俺は思っています」

そう、この企画はすぐに効果が出るような企画じゃない。

地道に宣伝し、訪れるお客に強く印象づけていかなければならない。

「ですからどうか、企画が成功するその時まで皆さんの力を俺に貸してください」

その言葉を括り、俺は集まってくれた商店街の皆に頭を下げる。

そんな俺を商店街の皆は優しい目で見ていた。

「そんなに気負わなくても良いんだよ。あたしらも商店街の為に協

力させてもらってるんだからね」

「そうですね。陽介君だけでなく、私達全員でこの企画を成功させましょうね」

「そうだ、俺一人が頑張るんじゃない。ここにいる全員で、この企画を成功させるんだ。」

こうして稲羽御当地名品と銘打った、稲羽中央通り商店街活性化に向けての活動がスタートした。

ジュネスの一角に特設コーナーを設けて開始した稲羽御当地名品だが、予想通り芳しくない結果からのスタートとなった。

とはいえ、無関心って訳ではなかったから今後の宣伝活動などで少しずつ流れを作っていけばいいだろう。

クマにも手が空いているときは、こっちの手伝いを頼んだ。
あんな性格はしているが、あれでなかなか客受けは良いからな。

企画を始めてから半年が過ぎた頃。

巽屋の商品を出店している期間中、完二に協力を頼んで編みぐるみ教室も一緒に開催してみた。

完二は八十神高校を卒業後、家業の手伝いの傍ら実家で染め上げた染め物を使用した独自のマスコットを制作。

菜々子ちゃんを始め俺達にも完成記念とかでいくつか渡されたのだが、その内に一つをりせがテレビに出ているときに話題になり、口コミで評判が広がったそうだ。

その事もあってか、完二の事を知る現在の八十神高校の女生徒達の間では、完二の作る編みぐるみがブームになりつつあるそうだ。

聞いた話だと完二自身にもファンの子が出来てるそうだ。

何でも恐そうに見えてその実、純情で優しい所が可愛いとか。

好かれる事は良い事だと思うが『可愛い』って言われるのは正直微妙なところかも知れないな。

そう言う流れもあって、完二の編みぐるみ教室ジユネス出張所は人気が高く宣伝効果としては申し分がないと思う。

他の店舗も評判が出てきて、良い方向へと向かっていると思う。

常時商品を置く事が出来ない丸久豆腐店の豆腐も、その事が逆にレアものという認識を持たれてか即日完売するペースが最も早い。

ただ、これではジユネスでここの豆腐を買いたいと言っていた菜々子ちゃんの希望が流石に無理になるので、前もって菜々子ちゃんへは連絡を入れて取り置きするように手配する事にした。

職権乱用ではあるが、この企画のヒントをくれた菜々子ちゃんへ対するお礼なので問題はないだろう。

コニシ酒店の商品に関しては、化粧品と酒を分けてジユネスにて常時取り扱い商品とする事でこの企画の主軸となっている。

元々コニシ酒店でのみ扱っている、幻の芋焼酎『森乱丸』をジユネスでも少数扱うようにした所、口コミで全国の芋焼酎愛飲家からの問い合わせが一時殺到したのは正直驚いた。

対応としてはジユネスでは量を扱っていないので、コニシ酒店の方へと問い合わせてもらうように誘導するようになっている。

日本酒から作った化粧水の方は稲羽では知名度が低かったが、今では外から来るお客の口コミの効果もあってか順調に売り上げを伸ばしている。

こちらの方も少数を扱うようにして、問い合わせがあるとコニシ酒店の方へと誘導している。

稲羽中央通り商店街の方も、ここ最近の所は外から来るお客さんが増えたとかで活性化への兆しを見せ始めている。

この調子なら1〜2年もあれば目標が達成できるかも知れない。

目標を達成しても、企画自体は続けていく予定だ。

晴れ渡った青空を見て思う。

ジュネスと稲羽中央通り商店街が協力している姿を、小西先輩に見せたかったと。

先輩が居なくなり3年が過ぎたけど、俺達はこうやって頑張ってる。生きていく。

これからも大変な事があるだろうけど、こうやって皆で協力すればきつと上手く行くだろう。

だから小西先輩、天国から俺達の事を見ていてください。

先輩が誇れるように、俺達は精一杯頑張っていくから。

2010年07月16日 投稿

久慈川りせ 『飛翔、再び』

先輩が稲羽から去って2年生へと進級した私は、本格的に芸能界復帰への準備を開始した。

たった1年のブランクでも、この業界ではそれまでの人気を取り戻すのは容易ではない。

あの時に全部を失ってしまったけれど、また一から作り直せばいい。

手紙をくれたファンの女の子にもう一度、私が活躍する姿を見て欲しい。

傍にいて力になってくれた先輩や、どちらの私も私だと言ってくれた菜々子ちゃん。

失した後で見つけた私の宝物……

最初の関門は事務所に戻り、復帰を認めてもらうことだった。

あれだけの啖呵を切って出ていったのだから、そう簡単にいくとは思ってない。

予想通り、かなみの売り込みに力を注いでいる社長達は難色を示した。

そんなことで諦める私じゃない。

頭を下げて食い下がり、社長達が根負けして何とか復帰を認めさせることに成功した。

条件として、仕事は自分で探してくること、事務所の方ではこれまで通りのサポートは行わない。

かなみの事があるので仕方がないとその条件を飲んでの復帰だったのだが、その時の私は一人で全てを行うことの大変さ樂觀視してたんだ……

一人で仕事を探すというのは実に大変なことだった。仕事の募集や役のオーディションはまず事務所宛に来るのだが、事務所側からのサポートが無い私はそこから回してもらおうことが出来ない。

私が休業している間にかなみの売り込みが進んでいたため、当時の関係者に当たっても仕事を紹介してもらうことは厳しかった。こうして一人でやってみて、初めて井上さんの存在のありがたみが解った。

分刻みでのスケジュールに色々と思うところがあったけれど、井上さんや事務所の助けがあってこそだったんだ。

その事が解っただけでも、私にとっては良い経験になったのだと思う。

本当、私って何にも知らなかったんだな。

学校が終わると仕事やオーディションを探す日々も数ヶ月が過ぎ、季節は夏になっていた。

ゴールデンウィークに皆や先輩に再会してやる気を充電してきた私は以前、仕事でお世話になった風見響子かざみきょうこさんと再会した。

「りせちゃん、久しぶりね」

「ご無沙汰してます、響子さんもお変わり無さそうで」

風見響子さん。

中高生向けのドラマなどを手がける女性監督さんで、学園モノなどを手掛けると右に出る者が居ないほどの実力者だ。

「そう言えば現場復帰したそうだけど、大変そうね？」

「そうですね。正直に言うと、独りで仕事を探すのがこんなに大変だとは思いませんでした」

響子さんは私がデビューして最初のドラマ主演が決まったときの監督さんで、それ以来の関係だ。

最初に彼女と仕事をしていなかったら、私は演技をすることが今ほど得意になっていなかったと思う。

「そう……やはりブランクが出来てしまうと何かと不便するわね」

「響子さんは打ち合わせの帰りですか？」

出来ればこの話題は続けなくなかったので、話題を逸らすために響子さんに訊ねてみる。

「打ち合わせというか、オーディションの帰りね。今度、特別ドラマの監督をやることになってね、その役者探し」

響子さんの話しによれば、今度の特別ドラマではテニス選手を指す主人公ヒロインの物語らしい。

事故で肘を痛め、医者からは手術をしても完璧に治らないと診断される。

その事で一度は挫折するが、そこから立ち直るといつ内容だ。

「主役などの主立った配役は決まっているのだけど、どうしても人決まらない役があつてね……」

「どんな役なんですか？」

私が質問すると、響子さんは私の顔をじっと見つめ何やら考え込んでいたようだった。

「……そうね……りせちゃんなら、いえ……りせちゃん以外は」

「……響子さん？」

「あっ、ごめんなさい。ねえ、りせちゃん、一つやってもらいたい役があるのだけど、良いかしら？」

「はい？」

響子さんからの突然の申し出に、私は啞然と答えるしか無かったのは仕方がないことだと思う。

(まさか、こういう事になるなんてね……)

響子さんからのお願いは、私に特別ドラマの決まらなかった役をやってもらいたいと云うことだった。

(それに、まさか主人公が……)

それだけでも驚きだったのだが、まさかヒロイン役がかなみとは、なんの冗談かと思った。

もつとも、それは向こうも同じだったらしく井上さんは困惑した表情をしていたし、かなみは鳩が豆鉄砲を喰らったような表情をしていた。

「りせちゃんにやってもらいたい役はね……」

響子さんの説明によると、私の役は医者 of 診断に絶望したヒロインがテニスラケットを投げ捨てたところ、それを拾ってヒロインに手渡す役だという。

その役は、自身も病気で足が麻痺しており手術で切断しなければならぬらしい。

それでも絶望することなく、前向きに生きる姿を見てヒロインが立ち直るといった内容だ。

私の出番はそのワンシーン。ヒロインが投げ捨てたテニスラケットを拾って手渡すだけで、台詞も「はい、これ」と数言だ。

それでも私はこの役を受けることにした。
何もしないよりは遙かに良い。ほんの僅かな時間だけど、演技をする事が出来るのだから。

私の出番の撮影当日。

現場に早くから入った私はある準備に取りかかった。

「おはよう、りせちゃん……それは、何？」

「おはようございます、響子さん。これですか？」

響子さんが言ったそれとは、私が膝を曲げ、足首と太ももを紐で縛っている事なんだと思う。

「私の役は、病気で足が麻痺した役ですよ？ ですから、その感覚を掴もうと出番までこうしていようと思って」

私の説明に響きさんは一瞬呆れた表情をしたが、すぐに満面の笑みを浮かべてくれた。

「そう。りせちゃん、前に比べてすごく生き生きとしているわね。休業中に何かあったの？」

「色々と大切なことがありました」

響きさんの質問に私がそう答える。

稲羽であったことは本当に私にとっては大切な出来事だったと思う。

「なるほど、りせちゃんの出番、期待しているわよ？」

「ハイッ！」

りせちゃんの本番を前に、私は撮影スタッフにある指示を出していた。

「監督、カメラの準備が完了しました。いつでも大丈夫です」

「そう、ありがとう」

準備が整ったとの報告を受けた私は、撮影開始の合図を送る。

本来の予定には入れてなかったが、今朝のりせちゃんを見て良い映像が取れると確信してのことだ。

1年のブランクがあるとは思えないほど、彼女の気力は充実していた。

思えば初めて一緒に仕事をした時も、彼女は他の役者達から抜きん出ていた。

場の空気を読む勘の良さ、与えられた役をただこなすのでは無く、自身の解釈を加えての演技力の高さ。

何より、彼女の瞳だ。

彼女の瞳は、人を惹き付ける輝きを持っていた。

あれは天性のモノだが、彼女は才能に溺れることなく努力を惜しまなかった。

あの若さであれだけの実力を発揮するのは並大抵の事じゃないだろう。

本音を言えば”真下かなみ”ではなく”久慈川りせ”をこのドラマの主人公にしたい位だ。

それ程までに彼女達の実力には差があるのだ。

とはいえ、りせちゃんが休業していた間に決まった事だから配役を替えるわけにもいかず、偶然を装って彼女に仕事の話を持ちかけたのだ。

真下かなみは決して下手な役者ではない。

しかし、どうしても役を演じようとするために粗が目立つ。

今もそうだ。

りせちゃんの演技に吞まれてしまっている。

「す、凄い……」

カメラマンの驚嘆する声が聞こえる。

それもそうだろう。

真下かなみ演じるヒロイン”宮永ゆう”が投げ捨てたラケットを、久慈川りせの演じる”少女”が拾い届けようと階段を上っていく。

しかし、それは演技には見えないのだ。

病気で不自由になった足を引きずり歩く様が、額に汗を流し必至に階段を上る姿が本物に見えるのだ。

彼女が今朝、自身の足を紐で縛っていたのはこの演技のためだったのだ。

たったワンシーン。

ただそれだけのために彼女は自身の足を縛り、足の感覚を本当に麻痺させたのだ。

彼女が階段を上りきり、ヒロインへとラケットを差し出す。

「はい、これ」

『カット!』

撮影が終了し、スタッフの緊張が解ける。

「りせちゃん、OKよ。お疲れ様!」

「ありがとうございました!」

私の言葉に、りせちゃんが満面の笑みを浮かべて返事を返す。

本当、休業中に彼女に何があったのかが気になるわね。

撮影は一発OKだった。

久しぶりの演技だったけれど、思ったほど勘は鈍ってなかったよ
うで安心だ。

このドラマは来月放映される予定なので、後で皆にメールで連絡
しようと思う。

そう。

このとき私は気付いていなかったのだ。

かなみが私に対して敵愾心を抱いていたことに……

ドラマの放映を観て私は驚いた。

私の役は名前のない、言ってみれば端役だったはずだ。

それなのに、今テレビに映っている私が出たシーンでは、私がアップで画面に出ているのだ。

画面を分割して、かなみが演じるヒロインが私の演じる少女の姿に吞まれている姿が映し出されている。

私とかなみの姿を一緒に、または交互に映すことによって、自身の境遇に絶望していたヒロインが立ち直る切っ掛けになるように演出されている。

本来だったら私の姿はラケットを拾うところと、階段を上りきりヒロインにラケットを手渡すだけのはずだ。

それが、ラケットを拾ってから階段を上りきるまで、そしてヒロインにラケット手渡すまで私が画面に映っている。

啞然とする中ドラマは進み、いつの間にか終了していた。

ドラマが終了して少ししてから、メールが複数届いた。

稲羽の皆からだ。

内容はどれも私の出番に関することだ。

私自身、皆にはほんの少しだけしか出ないからと連絡したのに、いざ蓋を開けてみればアップで映っていたのだから、皆以上に私が驚きだった。

皆からのメールを読み終わるとほぼ同時に、携帯電話の着信音が鳴る。

携帯の着信画面を見ると、相手は先輩からだった！

「はいつ、りせです！」

『久しぶり、ドラマを見たよ。端役と言っておきながら凄く重要な役所で驚いたよ』

「本音を言うと私もビックリですよ。私だってこんな風に演出されてるなんて思わなかったですから」

久しぶりに聞いた先輩の声は懐かしく、嬉しさでどうにかなってしまいそうだった。

その後、先輩と他愛ない話を続ける。

電話を切る間際、先輩から気になることを言われた。

『りせ、このドラマが切っ掛けで色々と忙しくなると思うが、何か困ったことがあればいつでも連絡してくれ。決して一人で悩みを抱え込むな』

「もう、先輩ったら心配性ですね。大丈夫です、真っ先に先輩に相談しますから！」

そう言っただけ先輩との電話を切った私は、久しぶりに良い夢が見られるような気がした。

それから、先輩が言った通りの事が起こった、

あのドラマを観た関係者から私個人に対してオファーが来るようになったのだ。

とはいえ、私自身のスケジュールは私が管理しているので全部の仕事を受けることが出来ない。

せっかく私個人を指名してくれたけれど、事情を説明して私がやりたいと思った仕事を受けることを了承してもらった。

以前と同じように、分刻みのスケジュールは流石に私だけでは管

理できない。

先方もその事は理解してくれているのがせめてもの救いとも言える。

もっとも事務所の方に、以前のようにマネージャーを付けないのかと打診があつたみたいだけど社長は誤魔化していたようだ。

やりがいのある仕事を選び、一つ一つ着実にこなしていたら、いつの間にか時間は過ぎ私も高校3年で卒業を控える身になっていた。先輩は高校卒業後、持ち前の多才な特技を生かして今は海外で仕事をしているそうだ。

仕事の内容は聞いていないが、私も含めて皆には定期的にメールで近況が届いている。

この頃になると、私も自信のスケジュール管理も大分できるようになり、これまでにやったことがないタイプの仕事にもチャレンジするようになった。

でも……

この頃から私の周りで奇妙なことが起こり始めたのだ。

それは小さな異変だった。

以前から私を妙に敵対視するようになったかなみが路線から外れた仕事をするようになった。

中学を卒業して、高校に進学したからだと言えばそれまでなのだが、事務所の方針にしては違和感がある。

私の方は、あの事件を経験したことが影響しているのか、落ち着いていたキャラクターという認識が定着したため、以前よりも人気が上がっている。

そのせいか依頼が来る役柄も明るい女の子から、落ち着いて一步引いたところから皆を引っ張っていくといった役が増えてきた。

これは先輩を意識して役作りをしているので、これもあの時の経験が生きているのだと思う。

そんな中、私に来る仕事の量が徐々にだか減ってきたのだ。

最初は気のせいだと思っていた。

だけど、私自身が失敗をしたわけではないのに仕事の数が減ってきてくると、流石に作為を感じる。

それとなく調べてみた結果、事務所の方が関係各位に手を回しているようだった……

「社長、いくら何でもやりすぎです!」

「うるさい! これ以上かなみの人気を落とすわけには行かないんだっ。かなみに一体どれだけ注ぎ込んだか、貴様にも解っているだろう!」

ある日、偶然聞いてしまった社長と井上さんのやり取り。

「しかし、だからといってりせの仕事を減らすよう工作するなんて間違っています! りせもウチのタレントなんですよッ!」

「……貴様、そんな事をいえた口なのか? 貴様がかなみを上手く使わないから人気低迷してきたんだろうが。いや、それよりも……」

それは、信じられないやり取りだった。

「そもそも貴様が、りせの手綱をしっかりと握っておかなかったからこうなっただろうが!」

「……それはッ!？」

「貴様にもりせと同じ年頃の娘が居たよな? 進学を控えて何かと入り用だよなあ? 良いのか、儂に刃向かうような真似をしても?」

デビューした私を可愛がってくれた社長の言葉とは思えなかった。井上さんも家族のことを持ち出されたせいも、強く反論することが出来ない……

私は、目の前が真っ暗になるような思いだった。

まさか、自分の所属する事務所からの妨害に遭っていたなんて……私は社長達に気付かれないようにそつと事務所を出ると、ぐちゃぐちゃになった頭を整理するために自宅へと戻った。

何もかもが信じられなくなった。

信じていた社長からの裏切り行為。

井上さんも自身の家庭があるから、社長に逆らうことは出来ないだろう。

芸能界に復帰して2年目の私に立ちはだかった大きな壁。

(決して一人で悩みを抱え込むな)

脳裏にあの時の先輩の声が甦る。

(そうだ、先輩は困ったときには連絡してくれと言ってくれたじゃないか!)

私は携帯電話を取り出すと、震える指先で先輩へと電話を掛けた。

『はい、神楽です』

「……………せ、んぱい……………」

『りせか？ 何かあったのか』

先輩は私の声を聞いてすぐに私に何かがあったことを悟ってくれた。

「……………先輩、私を……………助けて」

余程と気が弱くなっていたんだろう。

先輩の声を聞いて安心した私は涙を止めることが出来ないまま、先輩に事情を説明した。

私が全てを話し終えるまでの間、先輩は何一つ聞かずに私の話を最後まで聞いてくれた。

『りせ、次の仕事はいつだ？』

「さつきも説明したけど、今のところは未定状態だよ」

『そうか。明日、日本に帰国する。今後のことについては会って話をしよう』

先輩が来てくれる！

そう考えただけで私の体に力が戻ってくる。

「うん、待ってる。出来れば迎えに空港に行くから、到着時間をメ

ールで送ってね」

『解った。それじゃ明日』

そう言って先輩は電話を切った。

先輩が帰ってくる。私は帰国した先輩にひどい顔を見せないように今日は早く休み、体調を整えることにした。

先輩からのメールにあった時間に私は空港へと到着し、出口で先輩を待つことにした。

出口をボンヤリと見ていた私の視線の先に、懐かしい人影が映る。

「先輩っ！」

ロビーに出てきた先輩へ私は駆け寄り、先輩に抱き付く。

「へえ、鏡也も中々やるわね」

その声に私が声の主の方へと視線を向けると、そこには先輩より少し年上、20代前半くらいの女性が居た。

「ッ!?!……先輩、こちらの方は？」

私は慌てて先輩から離れて女性のことを先輩に尋ねる。

「自己紹介がまだだったわね。私は神楽凜鏡也かぐらりんの母親よ」

自己紹介をする女性の言葉を理解するのに、少しの時間が掛かった。

えっ？ 今この人はなんて云ったの？ 先輩の……母、親？

「えええええッ！？」

嘘、どう見ても子供がいるように見えない！ それどころか先輩と並んで立つと姉弟にしか見えない！？

「あっははははは、やっぱり普通は驚くわよねえ。でも、これは本当のことだから」

女性、凜さんはカラカラと笑うと私へと見事なウイंकをしてくれたのだった。

「なるほど、ね。つまり、りせちゃんの人気を妬んでの妨害工作を事務所側がやっていたと云う訳ね」

「しかも、りせにマネージャーを付け無いどころか一切のサポートもしていないとは、質が悪いな」

私からの説明に凜さんと先輩が渋い表情で話す。

「りせちゃん、三日ほど時間をもらっても良いかな？」

何かを思い付いたらしい凜さんが私に尋ねてくる。

私の方は特に急ぎの用事がないので、凜さんの申し出を受けることにする。

でも、凜さんは何をやる気なんだろう？
私の感じた疑問は三日後に解ることになる。

「それで、母さんは情報を集める気なんだろうけど、俺は何をしたら良い？」

三日後にまた会う約束をしてりせちゃんと別れた私達。
りせちゃんの視線を気にしなくて良くなったところで鏡也が声を掛けてきた。

我が子ながら良い勘をしている。

「事務所周りの情報は私の方で調べるから、アンタは事務所内の人間関係の流れを調べて。誰かが接触しているはずだから」

「解った。葛葉としては、今回の件をどう見ている？」

「畏の可能性も考慮に入れているわね。まさか、連中から泣きついてくるとは思わなかったし」

鏡也から稲羽で起きた事件のことは聞いているので、彼女にちゃんと説明しても良かったのだけど、今回の相手は勝手が違う。

正直、相手の力は未知数なのだ。

話を聞く限りでは、人の持つ欲望を増幅させて歯止めが利かなくなっているように見える。

このまま行くと周囲にまで呪力感染が拡大する可能性が極めて高い。

そうなったら最悪、この地域が丸ごと異界化して境界を越えて手に負えない魔神達がこちらの世界に干渉してくることになる。

だからこそ、私とワイルドの使い手である鏡也が派遣されたのだ

から……

三日後

「初めまして。葛葉商事コンサルティング部門所属の神楽凜と申します。今回、そちらに所属している久慈川りせ嬢の件でお伺いしました」

私を伴って事務所へとやって来た凜さんは、そう切り出して社長と私の処遇を巡って争うことになった。

凜さんの社長とのやり取りは私から見ても、まるで魔法の様な光景だった。

社長達が私に対して行ってきた行動の問題点を列挙して、私に対してどれだけ不利益な行動をしていたのかを詳細な資料を基に説明していく。

どこから資料の基となる証拠を集めてきたのかは解らなかったが、事細かな資料内容に社長の顔が蒼白になるのを見れば、資料内容が正しい事が解る。

「こちらとしては裁判所に提訴してもよろしいのですが、どうでしょう？ 彼女をこちらの事務所から独立させることで和解しませんか？」

凜さんの言葉の裏には、裁判沙汰になれば間違いなく多大な損益が出るぞという脅しが含まれているのが解った。

社長としてはここまでの証拠を押さえられているため、凜さんの要求を呑む以外になく、力ない表情で私の独立に関する誓約書にサインを入れることとなった。

事務所を後にした私達は、今後の事を決めるために喫茶店へと移動した。

「あの……凜さん、ありがとうございます」

私ひとりだったら、このまま潰されていたろう状況を打破してくれた凜さんにお礼を述べる。

「お礼を言うのはまだ早いよ。むしろこれからが大変なんだから確かにそうだ。事務所から独立したため、本当の意味でこれからの行動を決めていかなければならないのだ。

先行きの見通しが全く立っていない私の表情を読み取った凜さんは、カラリとした笑みを浮かべると、驚くべき内容を私に語った。

「ま、りせちゃんの次に所属する事務所はもう用意済みなんだけどね」

「……えっ!？」

「というか、りせちゃんの個人事務所と言った方が正しいかな。軌道に乗るまでは私が経営の面倒を見るし、りせちゃんのマネージャーは鏡也がやるから」

「えっ? ええええッ!？」

正に青天の霹靂だ。

私から話を聞いて数日の内にそんな準備をしていたなんて……資料集めだけでも大変だったはずなのに、いつの間にかそんな準備

までやっていたんだろう。

困惑する私をよそに、凜さんは先輩と今後の方針についての基礎方針を固めていく。

結果

私は新しい事務所での再スタートを迎えることとなった。

先輩が私のスケジュールを全て管理してくれるお陰で、私は自身の仕事に専念することが出来た。

新しい環境で充実した日々を過ごしていたある日、かなみが過労で入院したとの報道があった。

私が独立した影響で、かなみが無理を続けたのではないかと気になったが、先輩は別の事情からだと言ってくれた。

ひよつとすると先輩は何か知っていたのかも知れなかったが、先輩が心配しなくても大丈夫だと言ってくれたので、その言葉を私は信じた。

高校も無事卒業した私は、1年ほど日本を離れアメリカに活動拠点を移すこととなった。

私が独立して個人事務所を構えた事と先輩が私のマネージャーとして表に出てきた事により、マスコミから注目を集めたのが原因の一つだ。

先輩と私が二人で仲が良さそうにしているところを、週刊誌にスクープされたときは、稲羽の先輩達から確認の連絡がひっきりなしに続いて大変だった。

後になって、それも良い思い出になったけれど、先輩達が心配するような関係には結局はなることがなかった。

アメリカでの経験はとても貴重だった。英語が出来なくても先輩

が通訳してくれるから困ることはなかった。

けれど、ファンになってくれた小さな子供達からの言葉が解らなくて、悔しくて申し訳ない気持ちで一杯になった私は、先輩に英語を教えてもらうことにした。

付け焼き刃でどれだけだけ出来るのか不安があったけれど、先輩は大丈夫だと言ってくれた。

実際、先輩の言った通りに短期間で日常会話を問題なくこなせるようになったのは、自分でも驚きだった。

それからの私は、アメリカでの仕事が驚くほどスムーズになった。言葉が解るようになったため、相手の思惑が理解しやすくなったのが一番の理由だ。

アメリカでの仕事で一番の成果は、映画に出演できたことだ。

子供向けの冒険モノなのだが、日本への吹き替え板も上映されることが決まった。

そして、その吹き替えで私は自身の役の吹き替えをする事も決まっております、少し不思議な気分だ。

今、私はアメリカでの活動を終えて日本へと帰国する。

日本に帰国したら、先輩は私のマネージャーで無くなるけれど大丈夫。

私と同じように先輩の力を必要とする人がたくさん居るのだから、いつまでも私が先輩を独占するわけには行かない。

こちらでの活動を通じて知り合った人々の助けもあり、事務所のスタッフも充実してきた。

私自身も凜さんから経営とかのやり方を教えて貰い、少しずつではあるが出来ることの幅を広げている。

落ち着いたら、独自ブランドのアイテムとかも作ってみたいと思う。

完二だって、自分の特技を生かしたアイテムの販売をやっている

のだから、私も頑張れば出来るはずだ。

日本に帰国したら、まずは稲羽の皆に会いに行こう。
今の私を見てもらうために。

2010年07月18日 投稿

久慈川りせ 『飛翔、再び』（後書き）

変換ミスとタグ文の修正を行いました。

こちらの方ではタグが使えないので投稿時には気をつけていたのですが、完全に見落としていました。
ご報告、ありがとうございます。

クマ 『人として』

センセイが居なくなり、ヨースケ達も“受験生”とかで忙しい中、クマもジュネスで忙しい日々を送っていたクマよ。

ナナちゃんはその後、病院のお世話になることなく順調に回復してすっかり元気クマ。

クマ達がお休みの時は皆でナナちゃんと遊んでいるけれど、ナナちゃんは時々寂しそうにしてるクマ。

『相棒が居ないから寂しいんだろうな、やっぱ』

ヨースケがどことなく暗い表情でそう言っていたけれど、こればかりはセンセイが居ないことにどうにもならんクマ。

ゴールドデンウィークには戻ってくるってヨースケが言っていたから、それまではクマ達でナナちゃんを守るクマよ。

でも、ゴールドデンウィークって何クマか？

ゴールドデンウィークという連休にセンセイが戻ってきて、ナナちゃんはとても嬉しそうな表情をしていたクマよ。

やっぱりナナちゃんは、笑っている顔がとても似合うクマね。

ずっとセンセイが居てくれたら、ナナちゃんはいつも笑顔でいれると思うけど、センセイにもセンセイの都合があるから難しいクマね。

正確には『人でない』クマには理解できないことが多いクマ。

でも、この世界で生きていくのなら、クマもこの世界のことを知っていかねばならないクマ。

ゴールドデンウィークが終わり、ヨースケが何か色々調べ事を始

めたクマよ。

センセイにアドバイスを貰ったとか言っていたけれど、正直クマにはサツパリ解らんクマよ。

本当、人間の世界は不思議が一杯クマ。

「ヨースケ、どうしたクマ？」

ある日、難しい顔で調べ事をしているヨースケに尋ねてみたクマよ。

「ああ、クマか。いやな……」

ヨースケは難しい顔をしたままで説明をしてくれたクマ。

何でもジュネスのような大型チェーン店が進出した影響で、その地域の商店街に与える影響が何とか言ってるけど、クマにはサツパリクマよ。

ヨースケは呆れた顔で、稲羽中央通り商店街を例えにして説明を続けたクマ。

なるほど、そう言ってくればクマも理解できるクマよ。

難しく言って、クマのことを馬鹿にしたクマね。

ヨースケにそう抗議したら『悪かったって』ってクマに謝ったけど、ヨースケの表情は謝っているように見えないクマ。

でも、ヨースケの話を聞くと、確かに大変なんだなとクマも思ったクマ。

「今はまだ大丈夫だけど、何とかしないと拙いだらうな」

そう言ったヨースケの表情は、いつものヨースケとは違ってセンセイを思わせたクマよ。

それから季節は夏を迎え、クマにとっても大変な時期に入ったクマ。

炎天下の中、フードコートでの焼き場はマヨナカテレビの中以上に大変クマ。

「クマっ！ あと少ししたら交代だから、水分補給はちゃんとしろよ！」

そう言っただけで慌ただしく働くヨースケに答える暇も無いくらいに今日も忙しいクマよ。

焼いても焼いても追いつかないって、一体どうなっているクマよ！ 去年の事も踏まえて、今年は人員を増やしているのに変わらないってどういう事クマ？

「先輩！ こっちの席の注文、まだ来てないって言うてるツスよ！」

「解った！ 完二、すまないがこっちの方を少し頼む！」

カンジに答えたヨースケがお客様の所へと説明しに行っているクマ。

「クマツ！ 悪いが鉄板焼き3人前、大急ぎで頼む！！」

ヨースケが説明に行ったテーブルから追加の指示を出してきたクマ。

「解ったクマ！」

これはクマの腕の見せ所クマよ。

鉄板の一番熱くなる部分で表面を一気に焼いて、徐々に熱の低い位置に移動させる事で中にしっかり火を通していくクマ。

その都度に鉄板の一番熱い場所が変わるから、一瞬も気が抜けないクマよ。

そうやって、次々に焼き上がった物をカンジ達が運んでいくクマ。

「やっと終わったクマ……」

「何つうか、シャドウとやり合っている方が遙かに楽ツスね……」

「二人ともお疲れさん。去年は里中も手伝ってくれたんだが、流石に今年は頼めないからな」

チエちゃんは刑事になるべく猛勉強中との事で、今年は手伝いを頼んで無いクマよ。

ユキちゃんとナオちゃんは、それぞれ旅館の手伝いと事件の捜査協力で同じく手伝いは無理クマ。

リセちゃんは夏休みを利用して、今は稲羽を離れているクマ。皆がそれぞれ忙しくて、ちょっと寂しいクマね。

センセイも忙しいみたいで、こっちには戻ってこられないって連絡があったクマ。

ナナちゃんの事を頼むってヨースケに連絡があって、明日は皆で鮫川の河川敷で花火クマ。

流石にセンセイが居なくてナナちゃんは寂しいようだけど、その分はクマ達が楽しませるクマよ。

そう言えば、チエちゃんだけでなく、カンジも編みぐるみの教室

に来る人も増えてきて賑わっているクマ。

ユキちゃんもリセちゃんも、それぞれの目標に向かって頑張っているクマ。

クマもフードコートの焼き場を正式に任されるようになって、お給料が増えたクマ。

ホームランバーをたくさん食べられると喜ぶクマに、ヨースケは『ちゃんと貯金しろ!』って怒ってきたクマよ。

そのヨースケは何か悩んでいるように見えるけど、センセイと一番多く一緒に居たのだから、きつと自分で解決するクマね。

けれど……

本質的に人とは違うクマは、このままで良いのか時々すごく不安になるクマよ……

あつちで生まれてナナちゃん達との約束でこっちにいるけれど、本当にクマはこっちに居てもいいクマか？

ヨースケのパパさんとママさんはクマの事を本当の子供のように扱ってくれるのは嬉しいクマ。

でも、クマは皆に少しでも恩返しが出来ているクマか？

こんな事を話したら、きつとセンセイやヨースケは『気にしすぎだ』って言うってくれると思うクマ。

けど、クマはもつともつと皆に恩返しをしたいクマよ。

翌日になって、花火をたくさん買っていったクマ達は鮫川の河川敷に来たクマよ。

流石に近くに民家があるから打ち上げ花火ってヤツは駄目らしいけれど、それ以外の花火なら問題ないってヨースケが言ってるクマ。

最初はセンセイが居なくて寂しそうにしていたナナちゃんも、色とりどりの花火を見ている内に元気になってきたクマよ。

ナナちゃんはこうやって笑っている方が似合っているクマ。

「それじゃ先輩、点火するツスよ！」

そう言って、カンジがたくさん並べた噴出花火に次々と火を点けていくクマ。

次々と吹き上がる綺麗な炎に、ナナちゃんが目を輝かせているクマ。

これだけたくさんの花火が一度に炎を噴き上げれば、流石に壮観クマね。

来年は、センセイもそろって皆で花火が出来ると良いクマね。

「そうだ、皆に伝える事があるんだった」

そう言って、リセちゃんは今度“特別ドラマ”ってやつ出演が決まり、来週末に撮影に出掛けてくるって話してくれたクマよ。

「といっても、ほんの少しだけのちょい役だけだね」

そうリセちゃんは恥ずかしそうに話すけれど、その表情は凄く嬉しそうクマ。

その報告にヨースケ達は、久しぶりにリセちゃんをテレビで見られるって我が事のように喜んでいたクマ。

もちろんクマも嬉しかったし、何よりもナナちゃんが一番、喜んでいたクマね。

放映はいつか聞かされていないそうで、解り次第連絡するってリセちゃんは言っていたクマよ。

その報告に、皆でリセちゃんに『おめでとう』って言ったときの

リセちゃんの嬉しそうな顔は凄く輝いていたクマね。

花火の後片付けを済ませ、迎えに来た堂島さんと一緒に帰るナナちゃんを見送ったクマ達も、それぞれ帰ることにしたクマ。

「そっぴや、堂島さんも最近は、菜々子ちゃんと一緒に居る事が多くなってるよな」

「……去年にあんな事があつたからね」

ヨースケの言葉にチエちゃんがそう答えたクマ。

クマがセンセイ達と出会えた切っ掛けになった事件。

その事件に巻き込まれたナナちゃんは命を落とすことになったクマ。

奇跡的に蘇生したけれど、あの時の悲しみは今でも忘れないクマ。それは皆も同じで、二度とナナちゃんを危険な目に遭わせたくないって思っているクマ。

その思いが一番強いのが堂島さんで、今ではナナちゃんと一緒に居る時間を優先しているクマ。

「事件は解決したけれど、結局、マヨナカテレビの事とかは解らずじまいになつたよね……」

アメノサギリが元凶だつて事は解つたけど、アイツをやつつけたにも拘わらず、今も“向こう側”との行き来は可能クマ。

クマが“こっち側”に居るんだから、当然といえば当然だけど、あの世界がどうして出来たかは誰にも解つてないクマよ。

こっちの霧は晴れたけれど、向こう側は今も変わらず霧に包まれた世界クマ。

そして、変わらずシャドウ達が居て、ヨースケ達が生み出した場所もそのまま残っているクマ。

シャドウ達はあの頃と比べると大人しくなっているけれど、クマ達に対しては変わらず攻撃的クマね。

「俺達の“テレビの中に入る力”もそのままツスね」

「直斗に聞いたけど、稲羽以外ではテレビの中には入れないようだよ」

カンジの呟きにリセちゃんがそう答えるクマ。

「クマ、お前も稲羽以外ではテレビの中との行き来は出来ないのか？」

「試してみない事には解らないクマよ、ヨースケ」

「それもそうか。お前、基本的に稲羽から出る事が無いもんな」

クマの言葉にヨースケは納得した様子クマ。

ナナちゃんと遊ぶとき以外はジュネスで働いているクマはジュネスの家電コーナーとヨースケの家しかテレビに触れる事はないクマね。

「けど、直斗君の話は興味深いよね。稲羽だけでしかテレビに入れないのなら、稲羽には何かがあるって事だから」

「何かって、何？」

「今となっちゃ、確かめようも無いけどな。誰かが向こう側を悪用しない限り」

ユキちゃんの言葉に首を傾げるチエちゃんに、ヨースケがそう答えたクマ。

確かに、誰かが再び向こうの世界を悪用しない限りは、クマ達に出来る事は何もないクマね。

分かれ道に差し掛かり、それぞれ挨拶をしてクマはヨースケと一緒にお家に帰ったクマよ。

年が明けて、ヨースケ達も無事に学校を卒業したクマよ。

クマはヨースケと一緒にジユネスの社員となり、新しく入ってきたバイトやパートの人達に仕事を教える立場になったクマ。

チエちゃんは警察学校への入学が決まり、稲羽から離れる事になったクマ。

ユキちゃんは女将修行を本格的に始めると言っていたので、二人とは会う機会が少なくなるクマね。

3年生になったリセちゃん、カンジ、ナオちゃん達もそれぞれ忙しいみたいクマ。

リセちゃんは去年の”特別ドラマ”が切っ掛けになって、多忙な日々を送っているクマ。

それでも、ナナちゃんの事は気に掛けているみたいでメールで連絡のやりとりをしてるってヨースケに聞いたクマ。

同じように探偵のナオちゃんも稲羽から離れる事が増えたクマ。カンジは編みぐるみ教室のお陰か、周りの人と一緒に行動する事

が増えたようクマね。

それぞれの新しい始まり。

ナナちゃんも小学校3年生になって、ますます可愛くなってきた

クマ。

そう言えば、最近になって髪を伸ばし始めたナナちゃんは、リセちゃんに貰ったりボンで髪を一纏めにするようになったクマ。

その姿をセンセイに見せて『似合っているよ』って言われた時のナナちゃんの笑顔は、本当に可愛かったクマよ。

ナナちゃんはあるから更に元気になって、チエちゃんから教わった型がほぼ完璧になったってチエちゃんが言ってたクマ。

その言葉にヨースケの表情が青ざめたような気がしたけど、きっと気のせいクマね。

クマもフードコートの焼き場と着ぐるみ姿での子供達へのサービスと、平日と休日と違う仕事に勤んでいるクマ。

ヨースケは入社してから色々と思うところがあるようで、半年くらいして稲羽中央通り商店街のジュネス出店をパパさんに持ちかけたクマ。

この件についてはヨースケが一任される事になって、交渉に赴いたその日にヨースケが怪我をして帰ってきたクマよ。

怪我をして帰ってきたヨースケをパパさんとママさんが心配したけれど、ヨースケは『大丈夫だ』って何でも無いように笑っていたクマ。

「ヨースケ、本当に大丈夫クマか？」

「ああ、これ位どうって事はねえよ。そう簡単に上手く行くなんて俺も思っちゃいねえしな」

そう言って笑うヨースケに、センセイの面影を見たクマは大丈夫だと自然に思えたクマよ。

ヨースケも頑張っているのだから、クマも負けてはいられないク

マね。

ヨースケの頑張りが実を結び、ジュネスで“稲羽御当地名品”という販売コーナーが出来たクマよ。

最初はそれほど注目される事が無かったけど、ヨースケは諦めずに宣伝活動を続けていたクマ。

クマもそんなヨースケを手伝って宣伝を頑張ったクマ。

地道に活動を行くうちに、リセちゃん達も無事に学校を卒業する事が出来たクマ。

事務所から独立したリセちゃんのマネージャーをセンセイが務めていた事もあって、それを知ったチエちゃん達が凄い事になったいたクマよ。

あの時の様子は正直、思い出したくはないクマね。

リセちゃんは学校を卒業後、1年ほどアメリカに活動拠点を移したクマ。

もちろん、センセイもリセちゃんのマネージャーとしてクマ。

ニユースでリセちゃんの事が出る度にヨースケは録画したり、スクラップブックに記事を残したりしていたクマね。

リセちゃん達からの連絡はメールが主になったのは仕方がないけれど、近況を見る限り順調そうクマね。

センセイが付いているから、その辺りは全く心配してないクマ。

チエちゃんも研修を終え、無事に警察官として働いているクマよ。制服姿のチエちゃんが、クマ達に見られて恥ずかしそうにしてい

る姿はちよつと新鮮だったクマ。

けど、チエちゃんが思っている以上に凄く似合っていたし、ナナちゃんも『カッコイイ！』って褒めていたクマ。

ユキちゃんの女将修行も順調で、着物姿（ヨースケが『正確には和服な』って言った）のユキちゃんをよく見掛けるようになったクマ。

皆の中では一番オトナっぽいユキちゃんに、ナナちゃんが憧れの視線を向けていたけど、ナナちゃんもオトナに憧れているのかもクマね。

来年はナナちゃんも5年生になるクマ。

初めて会った時よりも背が伸びているし、伸ばした髪と相まって女の子らしさも感じられるようになってきたクマ。

このまま行くと、将来ナナちゃんは凄い美人さんになるクマね。そんな事をヨースケに話したら『同意はするが、お前が言うとな心満載だな』って言われたクマよ。

失礼な！ クマ、ナナちゃんに対してそんな邪な事なんて考えてないクマよ！

ナナちゃんはセンセイと同じくらいにクマにとって大切な存在クマ。

センセイはクマに“自分”という姿をくれたし、ナナちゃんはクマに“ここに居ても良い”という約束をくれたクマ。

今もまだ、クマはこっちに居て良いのか不安になるけれど、ナナちゃんはそんなクマに『こっちにいても良いんだよ』って教えてくれるクマ。

ヨースケ達も20歳になって“成人式”って言うのに行ってきたクマよ。

何でも人生の節目らしいクマ。クマにはよく解らない事だけど、大事な事なのクマね。

そんな事を考えていると、成人式から戻ってきたヨースケが何やら大きな封筒を手にして、不思議そうな顔をしていたクマよ。

「おかえり、ヨースケ。どうかしたクマか？」

「ああ、ただいま。相棒からお前宛のようだな。この間『クマに必要だと思っから』って聞いていたけど、何が入っているんだ？」

そう言って手渡された封筒を開けて中を確認すると何やら難しい事が書かれている書類の束が出てきたクマ。

「なんだコリヤ……帰化許可申請書……って、これクマの帰化申請の書類かよ!？」

「ヨースケ、帰化申請って何クマ？」

驚くヨースケに聞いてみたところ、クマを日本人として認めてもらえるようにする為に必要なモノらしいクマ。

何やら慌てた様子のヨースケが携帯電話を取り出してどこかに連絡しているクマ。

「もしもし、久しぶり。今、良いか？ 帰化許可申請書ってどうしたんだよコレ!？」

『無事に届いたか。流石に無国籍のまままで居るのは何かと拙いだろ
うから、伝手を頼って用意してもらった』

「用意してもらったって……相棒、今さらながらにお前の顔の広さに
呆れるよ……で、これはヤバイもんじゃ無いだろうな？」

『ああ、その辺りは心配しなくても大丈夫だ。書類は正式のモノだ
しな』

「何でクマの本国の戸籍謄本があるかが激しく謎だけどな……まあ、
いい。確かにちゃんとした戸籍がある方が良くからな」

『書類の必要条件上、クマの年齢は俺達と同じにしたが、さして問
題は無いだろ。こっちで用意できない書類は陽介の方で用意して
くれ』

「解ったよ。確かにこっちでなきゃ用意できないのが色々あるな。
親父達が戻ってきたら相談するか」

『これでクマの心配事が少しでも減ってくれば良いな』

「気を使わせちゃったな。ったく、本当にお前には敵わないよ」

『すまない、急用が入ったからこの辺りで』

「ああ、こっちこそ突然にすまなかつたな」

そう言って通話を終えたヨースケにどうしたのか聞いてみたところ、
センセイがクマを日本人としてこっちに居続けられるように手を
貸してくれたらしいクマ。

難しい事はサツパリだけど、クマの為にセンセイが手を貸してくれたって事だけは解ったクマ。

「に、しても……相棒のヤツ、何処からこんな事が出来る伝手を見付けてきたんだか……」

そう言ったヨースケの感心とも呆れとも付かない表情が印象的だったクマよ。

その後、帰ってきたパパさんとママさんを交えて、ヨースケがセンセイから届いた書類について話し合っていたクマよ。

書類の足りない分はパパさん達が用意してくれる事となり、帰化の動機書などのクマが用意しなければ駄目な書類については皆に手伝って貰う事になったクマよ。

フードコートに集まったのはヨースケとカンジ、非番のチエちゃん。と旅館の買い出しの合間に来てくれたユキちゃん。

そして、久しぶりに稲羽に戻ってきているナオちゃんのクマを合わせた6人クマ。

「流石は先輩と言ったところツスね」

ヨースケの説明を聞いて、カンジがそんな事を言ったクマ。

その意見にチエちゃんとユキちゃんも感心した様子を見せているけれど、ナオちゃんだけは普段通りだったクマよ。

「直斗はあまり驚いた様子は無いな」

「いえ、これでも十分に驚いていますよ。神楽さんなら出来て当然とも思いましたけれど……」

ヨースケの言葉にナオちゃんがそう答えたけれど、ナオちゃんは何かを知っているかもしれないクマね。

でも、あまり話したいようには見えないから、ヨースケもそれ以上はナオちゃんに訊ねなかったクマよ。

今回皆に集まってもらった用件は、クマの帰化動機書の作成の為クマ。

ナオちゃんが説明してくれたけれど、帰化の動機書には以下の事を主に書くと良いと言われたクマ。

今まで日本で生活してきた経緯

日本での生活になじんでいること

本国に帰る意思はないということ

今後も日本で日本人として生きていくという意志

これらの事をクマの直筆で書かなければならないクマよ。

「何ていうか、作文だよなコレ」

「ええ、動機書は本人の意思を確認する目的と、日本語の読み書きがちゃんと出来るかの確認も兼ねているんですよ」

「クマ、おめえ、漢字とかちゃんと書けんのか？」

「カンジは失礼クマね。クマ、ちゃんと漢字の読み書きが出来るクマよー！」

ヨースケとナオちゃんの話の聞いてカンジが失礼な事を言うてく

れたクマよ。

それでもクマ、自分の事を知る為にインターネットとか色々調べるに当たってたくさん勉強したクマよ！

「ああ、それなら大丈夫だぞ。最初は小学生用の漢字ドリルを使って覚えさせて、今では常用漢字の読み書きも大丈夫だぞ」

「へえ、クマ君もやるじゃん」

ヨースケの説明にチエちゃんが感心してるクマ。

それでもクマ。ナナちゃんの漢字の宿題を手伝った事もあるクマよ。

ナナちゃんに良いところを見せたいから、必死に頑張ったのはクマだけの秘密クマ。

「下手すると、完二よりクマの方が出来るかも知れないぞ？」

そう言っって意地の悪い笑みを浮かべたヨースケに、カンジが嫌そうな表情を見せたクマ。

「取り敢えず、クマ君が読み書きに不自由していかないのでしたら、本題に戻りませんか？」

そんなやりとりをしているヨースケ達に、ナオちゃんがそう言っって注意を促したクマ。

そうして、皆でクマがどういった事を書けば良いのかを色々と考えてくれたクマ。

「日本で生活してきた経緯はジュネスでの事をメインで書けばいいよな？」

「そうですね、同じように日本での生活になじんでいる事も、ジュネスでの接客態度やスタッフとの関わりを書けば良いと思います」

「本国に帰る意思はないという事は、菜々子ちゃんと神楽君達の事を中心に書けば良いかな？」

「雪子、それだったらあたし達の事も書いた方が良くない？」

「間違っても向こう側の事は書けないツスよね……」

皆がクマの為に色々と案を出してくれるクマ。

その様子を見て、クマは本当に果報者だと思ったクマよ。

これらの事を踏まえて、クマは帰化動機書を書いていったクマよ。ジュネスでのお客さんとの交流やスタッフの皆との事。

センセイやナナちゃんとの出会いから今に至るまでの皆との関わり。

これからも、ココで生活する上でヨースケと共にジュネスでやりたい事など。

こうして文章として書いてみて、改めてクマはこっちの世界の事が大好き何だなんて実感したクマ。

クマはこれからも皆と一緒に居たいし、ナナちゃんの成長を見守っていたい。

ヨースケのパパさん、ママさんもクマにとっては掛け替えのない存在クマ。

クマには親と呼べる存在が無いから、ヨースケのパパさんとママ

さんがクマにとっての両親クマ。

そうになると、ヨースケはクマのお兄ちゃんになるクマね。

クマに住む場所を与えてくれて、こっちで生きていく為に必要な事を教えてくれたヨースケ。

時々、意地悪な事も言ったりしたけれど、面倒見の良いヨースケはセンセイの次にクマの恩人クマ。

「……これならば問題は無いでしょう。後は足りない書類を揃えて法務局への申請を行い、受理後の面接などに備える位ですね」

ナオちゃんの説明によると、帰化申請はすぐに済むモノではなく、1年位は時間が掛かるそうクマ。

何でそんなに時間が掛かるのかクマには解らないのだけど、色々と処理に掛かる手順があるとか何とか言ってたクマ。

今揃えられる書類は全て揃え終わっているの、後はヨースケのパパさんから不足分の書類を用意してもらっただけになったクマ。

一通りの用件も終わり、ユキちゃんもそろそろ旅館に戻らないと駄目らしいので、今日の所はこれでお開きとなったクマ。

「クマ君の帰化申請、早く通ると良いね」

そう言って、チエちゃんが笑って話してくれたクマ。

後は書類を提出してクマが面接とかを頑張るだけクマね。

書類を提出して、その書類が受理されてから色々と慌ただしくなったクマ。

法務局って所に出向いて、色々と質問されたりしたけれど、本当

に疲れたクマ。

ジュネスでどういった仕事をしているのかとか、クマがどういった役割を負っているのかとか色々と聞かれたクマ。

面接が終わった時には、クマの喉はカラカラになっていたクマね。必要な事だとは聞いているけれど、もっと余裕が欲しいと思ったのはクマの我が儘じゃ無いと思うクマ。

後は審査の結果待ちで、面接を終えて戻ってきたクマにヨースケやパパさんママさんから『お疲れ様』って労われたクマよ。

それから数ヶ月して、クマの帰化申請が受理されたって連絡が来たクマよ。

受理された後も色々やる事があって、帰化の届け出と外国人登録証明書の返納をしたクマよ。

これは、クマの日本人としての戸籍を作る為に必要な事なので、連絡があつてすぐに手続きを済ませたクマね。

こうして、クマは日本人『熊田薫』として新しいスタートを迎えたクマよ。

センセイが用意してくれた書類にクマの誕生日が書いてあったのだけど、その日は7月10日。

クマが“こつち側”にやって来た日になっていたクマよ。

ヨースケは『確かにクマが生まれた日だよな』と何やら納得した様子を見せていたクマ。

年齢はヨースケ達と同年クマよ。

リセちゃんは『クマが年上って何か理不尽！』って怒っていたけれど、こればかりは諦めてもらうしかないクマね。

本当にセンセイにはお世話になりっぱなしクマ。

センセイだけじゃなく、ヨースケとパパさんママさんにもたくさ

ん良くしてもらっているクマ。

ヨースケが居なかつたら、クマはこっちで生活が出来なかつたし、それを認めてくれて本当の家族のように接してくれるパパさんとママさんの存在も大きいクマ。

人でないクマが、本当の人として生きていく最初の一步を踏み出せたクマ。

これからも、皆と一緒に泣いたり笑ったりしてクマはこっちの世界で生きていくクマ。

ひとりの『人』として。

2011年12月23日 初投稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5867m/>

PERSONA4 After ~ 過ぎし刻の足跡 ~

2011年12月23日06時52分発行